



Title	「新潮」：小説家「太宰」と人間「太宰」を支えるもの
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 39-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「新潮」

—— 小説家「太宰」と人間「太宰」を支えるもの

長 原 しのぶ

日露戦争の宣戦が告げられる一九〇四（明治三七）年二月、「戦時には戦時にふさわしい文学があってもよい筈だ」（『出版巨人創業物語』二〇〇五・一二、書肆心水）という佐藤義亮の思いを受け、同年五月一日、「新潮」第一号は刊行される。そのときの目次欄の上段には新たな「文学」を目的とすることを掲げた次の文章が記される。

國家自ら生動し、國民自ら活躍す。國運の勃興まさに無前と稱す。希くは我文学をして、剛健活大、此勃興時代に恰當するものたらしめよ。而して先づ彼の沈滞、萎靡腐敗の百妖を一掃せよ。我徒力微なりと雖も、期する所は大ならざるを得ず。謹で江湖志を同づる青年諸卿に告ぐ

「新潮」「評論」「小説及美文詩歌」「雑誌」と並ぶ目次（内、半分を「小説及美文詩歌」が占める）を確認すれば、執筆者には「新声」同人の田口掬江、西村醉夢、金子薫園らが名を連ねており、新潮社の前身である新声社の流れを窺うことができる。新声社が文壇的運動を目指した既成文壇の領域外にある新進の文士の発掘に力を入れていたことに留意すれば、「新潮」が掲げた「我文学」もその流れを汲むものであることは間違いない。

例えば、真山青果は「新潮」創刊記念号（一九〇七・五）に発表した小説「南小泉村」で文壇に名を知らしめ、『青果集』（一九〇七・二、新潮社）を出版するに至る。さらに、「新潮」は一九〇七年前後から一気に文壇の主流となった田山花袋、小栗風葉、国木田独步、島崎藤村といった自然派の評論家、作家だけすることに成功している。これにより、新潮社は一九〇八（明治四一）年四月に自然派の評論家、作家だけを集めた『二十八人集』を刊行し当時の文壇の新たな傾向を示し、文学出版の確かなメディアとしての地位を築くこととなる。新人の発掘と文壇の最前線という文学界での確かな位置を持って、「新潮」は存在した。

太宰治と「新潮」の関係を紐解いてみよう。「地球図」（一九三五・一二）、「めくら草紙」（一九三六・一）、「創生記」（一九三六・一〇）、「HUMAN LOST」（一九三七・四）、「姥捨」（一九三八・一〇）、「八十八夜」（一九三九・八）、「俗天使」（一九四〇・一）、「走れメロス」（一九四〇・五）、「清貧譚」（一九四一・一）、「新郎」（一九四二・一）、「小さいアルバム」（一九四二・七）、「故郷」（一九四三・一）、「新釈諸国噺

裸川」(一九四四・一)、「新釈諸国噺 人魚の海」(一九四四・一〇)、「嘘」(一九四六・二)、「親友交歓」(一九四六・二二)、「母」(一九四七・三)、「斜陽」(一九四七・七)、「如是我聞」(一九四八・三七)の太宰作品が全て「新潮」に掲載されている。一九三五(昭和一〇)年に発表した「地球図」以来、一九四五(昭和二〇)年を除き毎年少なくとも一作品は必ず「新潮」を媒体に作品発表を行っていることになる。

本号の特集でもある『晩年』掲載作品との関連性に注目すれば、「地球図」「めくら草紙」の二編を挙げることができる。「新潮」掲載時の「地球図」の本文には次のような序文が付されている。

「新潮」編集者檜崎勤氏 私に命ずるに、「ちかごろ何か感想云々」を以てす。案するに、「ダス・ゲマイネ」の註釈などせよとの親切心より発せしお言葉ならむ。拙作「ダス・ゲマイネ」は、此の國のジャアナリズムより、かつてなきほどの不当の冷遇を受け、私をして、言葉通ぜぬ國に在るが如き痛苦を嘗めしむ。舌を焼き、胸を焦がし、生命の限り、こんのかぎりの絶叫も、馬耳東風の有様なれば、私に於いて、いまさらなんの感想ぞや。すなはち、左に「地球図」と題する一篇の小品を默示するのみ。

「純文学の旗をたてて、一九三六年第一歩の堂々たる行進をおこした」(「記者便り」一九三六・一)という通り、「純文学」に力を入れ、文学界にその存在を示してきた「新潮」は、このとき、青野季吉、河上徹太郎、尾崎士郎、杉山平助、勝本清一郎、上泉秀信、阿部知二、中村武羅夫をメンバーにする「昭和十年文藝界の回顧(座談会)」をメインに掲げ、同時に諸家から「昭和十年に於いて印象に残ったもの」の回答を特輯して「文藝界」に切り込んだ。編集後記にあたる「記者便り」を確認すれば、「座談会」を「本年の文学界の動向のすべてを語り盡し、かつまた適切な批判のなされた」ものと賞賛し、「昭和十年における文藝界」の情勢を詳述することを第一の目的としていたことが窺える。

その延長線上に太宰に対する檜崎勤からの「ちかごろ何か感想云々」の依頼があったといえよう。そこには、現段階における文壇に対する新人作家の一視点を加えることが「新潮」側の目論見として働いていたと指摘することができる。それは、先に挙げた「昭和十年文藝界の回顧(座談会)」の中で、勝本清一郎

が「雑誌の編集術といふものが非常に発達したため、題目の選び方を執筆者側に委せないのでね。編集者がどうしても自分の方でお膳立を一通り立てちやつて、そして仕事を執筆者側にさせたがる」と批判した当時のメディアのあり方の一つといえる。

だが、そんな中で発表されたものは「地球図」と題する一篇の小品であった。つまり、「新潮」は執筆者である太宰の意向を尊重し、作家重視の「純文学の旗」の確立を目指すのである。太宰は「地球図」を「これは風刺に非ず、格言に非ず、一篇のかなしき物語にすぎず」と解説したうえで、完璧なる創作として世に出した。「記者便り」の最後には僅か六行ほどで「創作欄には、新人太宰治氏の「地球図」を始め、牧野信一、井伏鱒二、平田小六の四氏の作を以て飾りました。四篇、十二月文壇の逸作かと思ひます」との紹介がなされているに留まる。しかし、太宰にとって「新潮」は、純然たる文学発表の場、新進作家起用の場という役割を十二分に持っていたといえる。

続いて「新潮」に掲載された「めくら草紙」は「創作特輯二十篇」の中の二作品であった。この「創作特輯二十篇」には、他に室生犀星「生霊」、高見順「菊坂ルムベン会」、阿部知二「幻影」、島木健作「金魚」、石川達三「鮫」などの「中堅・新進の精鋭を網羅」した二〇名が並ぶ。選ばれた二〇名は「本年劈頭のわが文藝界へのヒットであらう。二十篇、何れの各作家の真面目を伝へて遺憾なき佳作である」(同「記者便り」と評されるように「純文学の旗」を掲げる「新潮」という一つの商業雑誌に認められた存在といえる。従つて、太宰治が新進気鋭の新人作家として確かな地位を築く礎として「新潮」が果たした役割は大きい。「めくら草紙」以降、「婦人画報社の「奥の奥」なるものより、をかしな註文来た」「大日本雄辯会講談社から、私の身元調査に来た」「つひに中央公論執筆。しかも二本立て、とか。一本だて。百枚以上」(一九三六・八・二二)、小館善四郎宛書簡)と立て続けに執筆依頼を受けることで自身の作家としての自負心を強めていく太宰の姿を見ることができ。

また一方で、「新潮」は一九三六(昭和一一)年当時の太宰にとって個人的に頼るべき対象でもあった。太宰は新潮社「新潮」編集部樗崎勤宛に七通の書簡(『太宰治全集第二二巻』一九九四、筑摩書房)をしたためている。

「新潮」編集長榎崎勤氏へ、窮状イツワラズ、披瀝、懇願ノ折、ワガ邪道、傲慢、無礼ニ氣ツキ、カクノ如着振舞ヒ、ニ、三ニ及ベバ、ワレ、九天直下、一夜ニシテ、ルンペン、見事ニ社会的破産者、タラム、コト、火ヲ指サスヨリモ的確、今カラデモオソクナイ、ワガ非、誰ヨリモ深く悔イ、誰ヨリモ酷烈ニ鞭ウチ、先夜ノ罪、一生力カツテモ、ツグナヒ申シマス。(一九三六・八・三)

津島家への返済をはじめとした借錢問題解決のために、「東陽」に発表予定の「狂言の神」(「東陽」一九三六・二〇)を六〇圓の稿料目的で、「新潮」に持ち込んだことを詫げる書状である。「新潮」側から原稿を返却された太宰は、「このたびの拙稿おかしなことも、他の編集者と事情異り、何十倍となく苦しく存じました」(一九三六・八・四)と榎崎勤を「得がたき知己と信じて」いるとし、個人的な感情(甘え)をもつて、「新潮」に接していたことが窺える。唐戸民雄氏は『姥捨』という作品が出来た。(略)之はすぐに売れた。忘れずに、私の作品を待っていてくれた編集者が一人あったのである」と『東京八景』(「文藝界」一九四一・一)に描かれている「編集者」は恐らく榎崎勤ではないかと指摘する(『太宰治大事典』二〇〇五・二、勉強出版)。作家太宰を作家たらしめるために、社会生活を送るうえでの金銭的配慮を含む支えとして「新潮」は重要であつたと考えられる。

そして、「新潮」との個人的紐帯を感じさせる同様の傾向は後年になつても消えることがない。戦後初のベストセラー小説となる「斜陽」を手がけた「新潮」編集者の野平健一は、「女類」(「八雲」一九四八・四)の登場人物、伊藤のモデルとして登場する(野原一夫「回想太宰治」一九七五・五、新潮社)。作品に描かれる伊藤、屋台のおかみ、笠井健一郎の物語が野平健一、ちとせ屋の房子、太宰治のやりとりに発想(野平健一「モデルの真贋」「太宰治研究」一九九六・七、和泉書院)があることを鑑みればその個人的繋がりは明らかである。以上のように「新潮」と太宰治の関わりを見れば、様々な雑誌メディアを通して作品を世に送り出した太宰であるが、前期、中期、後期を通じてほぼ途切れることなく年一回の発表を行つた「新潮」は、自身の作品を純粋な芸術文学として扱つべき場として存在したと同時にその個人的繋がりを持つて作家太宰を精神的に支える場としても機能していたといえよう。